

学校物語 (国吉小の巻12)

— 女中さん町を生む —
余木 令一

この「学校物語」もたいぶ長くつづいたので、こらあたりに、国吉小学校のその名に「吉」の字をいさつて、茶のみ話のつしはさむこととしよう。明治二十八年八つの村(現在の区)が合併して、国吉村が誕生した。合前にもふれた。質的に同じような町村合併の。質的に同じようなケースである。しかし、はじめに生まれる村の名称をなんとつけるかでは議論が百出した。刈谷村とか中川村とか次から次へと飛びだしたが、そのつど葬られてしまった。

いつ果てるともなかつたが、ついに名案が提示された。それは、小学校周辺から広くその辺一帯(ひとすて)に聞いていた者が、郷と呼ばれていたことを、人伝(ひとすて)に聞いていた者が、ゆくりなくもこのことを思った。したのであつた。郷(ごう)とは郡の下にあつたが、今日でいう郡という程度の意味と解していいだろう。その名こそ歴史的なゆかりがあり、且つ字のかつこ

うはよし、文字も縁起よしで、なゆかりが、国吉一案を可決し、その呼び名もクニヨシと近代的な発音に改められた。そして、早

くも翌年の明治三十四年には、

村からは替えることになつた。衣だけは次のようないわれがあつた。からだと伝えられていた。俗にお茶屋と呼ばれていた。ある市におもひき女中(酌婦)を雇い入れようとした。ところがその女中さん「村」という名の土地ではさみしい所にきまつていて、町ならいいが村ぢやまつびらごめんです」とすげない返事。彼は別な所でもまた同じような苦汁をなめさせられたのだった。彼は、ふんまんやるかたなくこの事実を村会で報告し、村と

いう名を以てしては酌婦の一人もたのめないとはし、刈谷といふ市街地が現存しているからには、よろしく「町」に昇格すべきであると主張した。満場どつと高笑つた。主張の動機がや

やこつけいじみていたからである。しかし自分たちの住む土地の貫録をあげるに異存のあらうはずもなく、この提案は認められた。春秋の筆法をちよいと拝借するならば、名もない酌婦国吉町を生む、という一見たあい

もなさそうな事件を私達は笑うことが出来るであらうか。今の世に、よその村から三人を無理して転入させ、人口をやつと三万に水増しして町から市に背のびした所だつてある。私たちの周囲にはこれに類したことが如